

STEP-UP

平成29年度 第1号 12月
大田区立幼児教育センター
幼児教育担当 TEL(5744)1618

安心・安定の園（学校）生活を基盤とし、運動会や発表会などの大きな行事を体験した子どもたちは、自信をもち一段と成長した姿が見られていることと思います。さて、今号では、今年度の「保幼小連携合同研修会」のまとめと「保幼小連携運動遊び指導者研修会」の様子を特集します。

保幼小連携合同研修会(7～8月) — 保・幼・小の滑らかな接続を目指して —

【協議会テーマ】学級集団の中で自ら考え、主体的に行動する子どもを育てるために


～アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの『接続期』に視点を当て考えよう～

平成29年に告示され30年度から実施される「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の中にも「保幼小連携・交流の機会を積極的に設けるようにする」「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有し、幼児期と学童期の円滑な接続を図る」など、具体的な実践策が年間のカリキュラムに位置付けられる必要があると明記されています。このことを踏まえ、保育者と小学校教師が参加する本研修会では、「スタートカリキュラム」は小学校の先生方、「アプローチカリキュラム」は保育園・幼稚園の先生方に作成していただき、双方のカリキュラムを貼り合わせて、入学を境にした時期（※接続期）に、子どもの学びや育ちがどのように繋がっていくのか、重要なこと、保育者や教師が大切にしたいことを3つの項目から話し合っていました。以下に9ブロックで共通に挙がっていた意見をまとめました。

アプローチカリキュラム（幼児期）

スタートカリキュラム（学童期）

※ 接 続 期 … 本研修では、5歳児クラスの9月～1年生の7月と捉え話し合った

項目	☆重要なこと	☆保育者・教師が大切にしたいこと
生活習慣・運動	<ul style="list-style-type: none"> 生活習慣については保・幼・小共通の課題なので、保護者も含め共通理解ができるとよい。見守ることも有効。 自分でできることは自分です。（和式トイレに慣れる。着替える手順を練習する。自分のものを管理する。） 箸を正しく持って給食を時間内に食べる。 ・個人差があるので確認できる表示の工夫。 ・交通ルールを守る。 自分の体に興味・関心をもち怪我や体調の悪さに気付き、言葉で伝えることができる。 時間を意識して生活する。⇒見通しがもてるようになり自ら行動する。⇒意欲的に生活する。 できていることの再確認と意識づけをする。 ・遊びの中で運動を取り入れ、基本的な体力をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする。 ・自分の気持ちを言葉で伝える。 ・話し合う機会を多くもつ。 ・良い所を見つけ伝え合う。 異年齢・異学年交流 ・他園や地域との関わりを意図的に増やす。 ・ルールや順番を守る。 困ったときに助けを求められる。（友達、先生に聞く。） ・名前を呼ばれたら返事をする。 友達とのトラブルがあった際、仲裁してもらいながら自分たちで解決する。
学びの芽生え	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな体験をする。 ・集団の中で話を聞く。 ・やりたいことを自分で選んでやる。⇒意欲を高める。 自分の名前を読み書き（正しい書き順で）ができる。 ・興味、関心があることを聞いたり調べたりする。 その場に応じた声の大きさを学ぶ。 ・手遊び、読み聞かせを積み重ねる。 ルールのある遊びをする。 生活や遊びの中で文字、数、日にち、曜日、時間を意識させる。 授業の中で「分かる」「できる」の声を多く聞けるように教材（教え方）の工夫をする。 	

交わし 合った 意見

- ・前倒しで取り組むのではなく、楽しく自信をもたせる。
- ・失敗してもいいよという雰囲気作りをする。
- ・いろいろな経験をすることで安心し、自信をもち、入学後によりスタートが切れる。
- ・自己肯定感を高めるには成功体験の積み重ねが大事。達成感を味わえるようにする。
- ・子どもたち同士で助け合ってできるようになることが多いので、入学後に差が自然となくなっていく。
- ・子どもだけでなく、保・幼・小の職員間も交流をもつ。（個別の課題、必要な支援を伝える。）

「幼児期運動指導リーダー保育者養成研修会」等でご指導していただいている体育科学博士：柳澤 弘樹先生をお迎えし、保育者及び小学校教師を対象とした研修（講義、グループ討議、実技）を行いました。今号では、幼児、児童が楽しみながら意欲的に運動に取り組むための実践方法を紹介します。

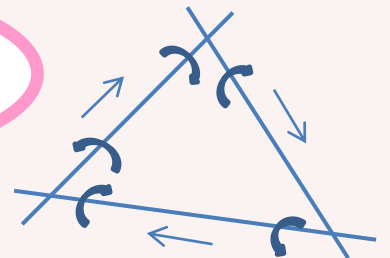
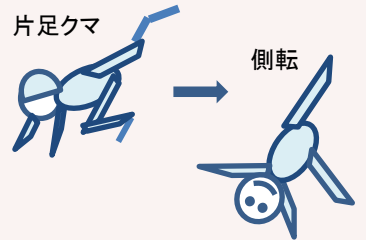
①新聞紙の上にしゃがみ、ゴールに向かい、長縄を手繰り寄せる



⑥鉄棒にぶら下がりながら、カラーボールを蹴る



⑤三角形に張った長縄の角部分を、片足のクマさん歩きでまたぎながら進む。最後に手を着き側転する



縄はクロスさせて固定すると安全

実践例

ポイント（6箇所①～⑥）を作り、サーキット遊びを展開する

【ex】忍者ごっこに応用

*心肺機能を高める。限界まで力を出し、楽しく競い合ったり、友達と協力したりしながら行う。

*作戦を考えるなど、子どもたちの取り組みにより発展していける。(⑥の例一条件を付ける・・・赤は蹴らない。黄色はキャッチするなど。)

②持った物を落とさず、障害(バランスボール)にぶつからないように、輪の中に入りながら進む



③ビニール袋ボールを、相手チームの陣地に投げ入れる



④4人でクマさん歩き(クマさん歩きの発展形)



幼児期から児童期にかけて連続した運動遊びを実践するために大事にしたい点や工夫したい点 (グループ討議の発表より抜粋)

- ・動物なりきりごっこなど、ピアノなどを使用して楽しく表現活動をする。
- ・廊下を利用してクマさん歩きをするなど、毎日運動できることを考えていく。
- ・運動能力には個人差があることを認識し、無理のない取り組みをしていく。
- ・保育園、幼稚園での成功体験を活かした小学校の取り組みが大切ではないか。
- ・小学校で「やらされている」と感じるか、「課題を自分で進めている」という気持ちで行えるかが、大事なこともかもしれない。



2つの研修会での意見交換を通して、幼児・児童理解や接続期に大切にしたいことへの共通理解を深め、「この時期に何を育てることが大事なのか」という視点を持ち、保育・教育実践の充実を図っていくことが大切であると感じました。

* 幼児教育センター *



